日本大学工学部

校友会報

第32号

昭和53年2月1日

目　次

あいさつ（工学部長・校友会長）	2
式典（30周年・記念館落成・銅像除幕）	3～4
30周年回想・校友会創設期・土木科5回クラス会	5～6
海外研修記	7
学術研究報告会・学部祭の運動会参加	8
学生の部活動・校友会支部総会・機械科9回クラス会	9～10
Campus mini Memo	11
事務局だより・・・新年度総会について	12

古田重二良先生銅像

題辞　日本大学総長　鈴木　勝
制作者　彫塑家　今里龍生

新年のごあいさつ

日本大学工学部長

外　木　有　光

昭和53年の新春を迎え、謹んで年頭の御祝詞を申しあげます。

昨年は政府が不況脱出を狙った施策にも拘らず、期待された程の効果はなく、産業界は低迷を続けて回復の萌しさえも窺えません。しかも、対外的には200海里漁業専管水域の問題、南氷洋捕鯨の問題その他によって漁獲量に厳しい制限を受け、また欧米諸国からは貿易の不均衡の是正に対する対策を迫られたり、円高が原因となって輸出不振に陥り、特に中小企業は致命的な打撃を蒙るなど、国内における経済活動の沈滞を招く事態があい次いで生起しています。のみならずこの影響は雇用不安を促し、社会問題となって軽視できない状勢に発展する怖れもあります。一方政界も与野党の勢力が伯仲するにいたり統一を欠き、離合集散による今後の政情は、俄かには予側できない複雑怪奇な様相を呈しています。このように混迷した世情の中にあって、校友諸兄には、直面した難局を打開するため、郡山で学んだ知識と鍛えた精神力によって縦横に活躍されている趣を伺い心強く感じています。

昨年は専門部工科がここに移設されてから30周年に当り、多くの記念行事を行いましたが、その際工学部がこれ迄辿った跡を回顧して感慨深いものがありました。とりわけ専門部の移設・これを第二工学部への転移・新校舎の建築・学部名問題の解決・紛争の収拾・時計塔の建設・古田先生銅像の建立など、その経緯を想起する時、いずれの場合も教職員・校友・学生・父兄の和喪協同によって成果を挙げ、工学部の隆昌が築かれてきたことを痛感しました。そしてこれら諸問題に際会し、その解決に情熱を傾けて奔走した校友諸兄の学生当時の顔が鮮かに目に浮びます。また去年の10月に落成した30周年記念館は、諸兄の思い出を懐かしむよすがともなるでしょう。最近大学の入試に絡んで、清純な教育の場としては考えられない不正事が数多く報道されています。日本大学はいち早く李下を離れて冠を正す抜本的な方策をたて、これを公表しました。この清浄な教育を根底に据え、既に緒についた新実験棟の建築を当面の目標として推進し、次の計画として運動場の整備、大学院・工学研究所の建設など逐次教育環境の充実に努める覚悟を固めています。これはまた教育・研究の内容を進めることにもなります。これ等すべてが共に手を携えて前進するわが工学部の伝統とも言うべき心の繋がりによって着実に築かれて行くことを確信しています。管理棟の前庭に建立された古田重二良先生の銅像は、工学部の心を象徴していると言い得ましょう。そして銅像建立に御協力下さいました諸兄の御芳志に対して、深甚なる謝意を表すると共に、校友諸兄には工学部の心を結び合って一層の御努力と発展とを希って新年のあいさつとします。

（日本大学教授・工学部校友会顧問）

ごあいさつ

会長　松　山　光　克

校友会発足二十年の意義ある新年を迎えることが出来たことは、校友諸氏と共に御同慶にたえません。

新年に際して、心をあらたにして活躍される校友諸氏の御健勝を御祈り申しあげます。さて昭和52年の会務を特記いたしますと昭和51年10月に発足した古田重二良先生銅像建立実行委員会は、日本大学校友会福島県支部、日本大学工学部父兄会、日本大学工学部校友会、日本大学工学部教職員並びに日本大学東北高等学校教職員等の四者がそれぞれの事務を分担し除幕予定の昭和52年10月28日を目標に広く全国的に日本大学関係者に募金活動を展開したところ、趣意に御賛同をいただき全国各地から熱意あふるる成果を得て無事除幕式が挙行できました。現在の校友会をあずかる私としましては光栄これに過ぐるものはなく、重ねて御礼申し上げる次第であります。また工学部においては開設30周年記念事業等が盛大に行われ工学部30年史も出版の運びとなり立派な内容がうかがわれ創設時代から30年のあゆみがありありと昔を懐しく思いおこすことができました。昭和52年4月に行われた郡山市長選挙に日本大学校友会福島県支部長である高橋堯氏が40年の行政経験豊富な力量がみとめられて当選し、ここに校友市長の誕生が実現致しました。より一層の信頼と実績を期待し、我々後輩も微力ながら一層の支援役となり手助けできればこれ以上幸いな事はないと存じます。

昭和53年度にのぞみ校友活動をなお一層の充実を計るには、工科系校友会との親睦は勿論でありますが、充分に連繋を密にする努力が必要であろうと思います。校友会員諸氏におかれては、各職域において役職にも慣れ職場の指導者として毎日多忙な生活でありましょうが、どうか会のために御指導御意見をいただきたく御願い申し上げます。

昨年の総会において会員の要望等にもあるとおり、役員の若がえりを計り新たな発想をもった会務を重点目標に進むことが必要とされております。役員一同会員相互の（和）をモットーにすすむべく努力いたしたいと考えております。新しい年に望み会員皆々様の御活躍を切望しごあいさつといたします。

（土木工学科第3回卒業・郡山市水道局勤務）

工学部が30周年を迎え盛大に記念式典挙行される

昭和22年専門部工科として生まれた工学部は、今年度で30周年を迎えた。学部はこの30年の歴史を振り返り、新たな希望を胸に、未来を築く意欲に燃え、10月29日の吉日、午後一時から、同学部講堂に、教職員、学生、来賓などおよそ 2500 人が列席し30周年を祝った。

式は、木村喜代治工学部次長の開会の辞で始まり、つづいて出席者全員による国歌斉唱のあと、外木有光工学部長が、敗戦後の荒廃した当時の世情のなかにあって、雑草茂る旧海軍航空隊兵舎に教育の場を拓いた古田重二良先生の果断と慧眼を讃えつつ、なお険しい私学の前途に向って、より一層精進する決意を表明する挨拶をされた。つづいて、鈴木勝総長も工学部が大学の建学精神を堅持しつつ、今日の特色ある学部として発展してきたのは先人の努力であるとともに、地元住民の協力があったことも忘れてはいけないこと、さらに最近、工学部卒業生の社会的評価が高くなっていることを喜ぶとともに、なお一層の発展を期待したいと、式辞を述べられた。

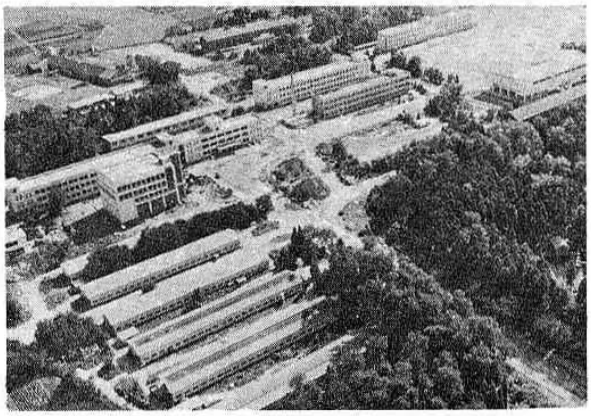
このあと、松平勇雄福島県知事（鷲尾県文書学事課長の代読）、高橋堯郡山市長、加藤渉理工学部長、松山光克工学部校友会長、吉富安孝工学部父兄会会長から祝辞が述べられた。その中で松山会長は「本学を巣立った多数の卒業生は現在各界各域で目ざましい活躍をしています。これこそ工学部の力であり、工学部が我が国に貢献した姿そのものであると祝辞を述べられた。

また、30年間の功労、多年勤続者への表彰も合わせて行われ、江崎伸市氏（元工学部次長）、　小林厳氏（元教授）、今泉貞雄氏（ＯＢ）、井上了介氏（秋田銀行頭取）ら４名に感謝状が贈られ、多年勤続者としては、廣川友雄教授ら78名が表彰された。そして江崎伸市氏、廣川友雄教授が、それぞれの立場から謝辞を述べられた。つづいて、工学部30年の中途にして逝かれた各位の御霊に対して黙禱して、その御冥福を祈った。そのあと、校歌斉唱、外木有光工学部長による謝辞とつづき、後藤弘工学部事務局長の閉会の辞をもって、午後二時、式典の幕を閉じた。

なお、工学部では、30周年記念の関連行事として、10月27日には、朝日賞の金井清生産工学部顧問による「地震工学の近年の動向について」、バイ中間子で著名な原治理工学部教授による「原子力平和利用の諸問題」、溶接工学の石井勇五郎工学部教授による「石油タンクの事故について」などの特別記念講演会を開催、10月28日には〝工学部の生みの親〟ともいうべき故古田重二良先生の功績と遺徳を後世に伝えるために今里龍生氏によって銅像が制作され、その除幕式が行われた。さらに10月29日午前10時には、30周年を記念して建築中だった記念館も竣工し、その落成式が行われた。なお、福島民報社では日本大学工学部開設の30周年を機に10月28日付から30回にわたり日大工学部物語を連載し、専門部工科開設時から今日までの歴史を人物にスポットを当てて編集した小冊をだし好評を得ている。

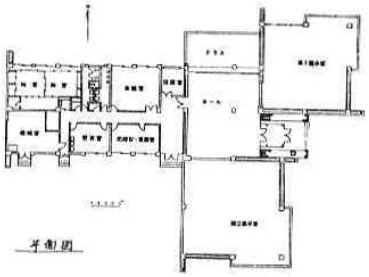
郡山市に文科系大学誘致の機運が盛り上がっている現在、日本大学工学部30周年記念式典の意義は大きい。同工学部の益々の御発展を祈るものである。

（工業化学科６回卒業・副会長　半沢　忠記）



記念館落成

30周年記念事業の１つとして「記念館」建設の地鎮祭が52年１月に行われ、工事が予定どおり進み10月29日竣工落成式が挙行されました。10月28日が古田先生銅像除幕式、29日記念館落成式と30周年記念式典が盛大に挙行されたわけであります。落成式は日本大学本部より鈴木総長をはじめ、副総長、副理事長常任理事、各学部長他多くの来賓のもと厳粛に行なわれ、記念館の建設に関係した１人として誠に感慨無量なものがありました。工学部も開設当時の校舎はすべて旧海軍航空隊の兵舎をそのまま使用、30年後の現在では殆んど老朽化したため解体され、毎年環境整備の進歩に伴って教育施設の陣容を一新しております。記念館の建設場所は旧木造１号校舎の跡で、１号校舎は50年12月に解体されたものであります。記念館の設計は工学部工学研究所がこれにあたり筆者も１メンバーとしてその任にあたりました。記念館の内容は、工学部の伝統ある歴年の資料および学術参考品等を一堂に蒐め永く保存し展示するために展示室２、会議室１、和室２、事務室１、資料収蔵室１、等で構造ならびに延面積は、鉄筋コンクリート造の 868平方米であります。内外壁面のタイルは信楽燿変タイルが多く使用され、屋根は銅板葺きとしました（写真）。外部に面する建具は凡て耐候性高張力鋼が使用されております。全館空調設備がなされ総工費１億 7900万円であります。今は記念館周辺の道路と庭園関係が計画どおり工事中であります。現在第１展示室には専門部工科開設時の地形、



建物配置模型 $^{1}/_{500}$ と木造１号校舎 $^{1}/_{50}$ の模型、現状の建物配置図が対称的に展示されており、古田先生銅像の原型（石膏）も同室に置かれ、あたかも工学部の将来を洞察するが如きであります。開設30周年の記念館の建設に対して微力ながらも貢献できた筆者等は、校友諸兄が母校の変貌を一見されることを心から望むものであります。

（佐藤満夫建築学科第６回卒業・
建築学科専任講師・管財課長兼任）

厳粛に銅像除幕式典を挙行

工学部開設30周年記念式典の前日、工学部生みの親であり、今日の学部の隆昌発展に精魂を傾けた、故日本大学元会頭古田重二良先生の功績を永遠にたたえるため、日本大学校友会福島県支部、工学部校友会、同父兄会、工学部、東北高校教職員の総意に基づき、古田重二良先生銅像建立実行委員会（委員長、外木有光工学部長）を結成し、日本大学校友会協賛のもとに広く募金活動を行って参りましたが、各団体及び諸兄弟の御協力により、銅像 2.6 m、総高 5. 78 mの堂々たる銅像が菊薫る秋晴れの10月28日、午後２時から豊かな自然環境に恵まれた中庭に於て、鈴木日本大学総長、高梨副総長、柴田校友会本部長、大学本部各理事及び高橋郡山市長をはじめとして来賓多数御臨席のもとに、古田家御遺族をお迎えして盛大に意義深い除幕式典が挙行された。石田工学部事務長の司会、松山工学部校友会長の開式のことば、修祓式の後鈴木日本大学総長、外木工学部長、古田元会頭御遺族タミ夫人、長男正武氏が紅白の綱を引くと、原稿を右手に持ち、左手を軽く後に回し、工学部の隆昌発展を願い、未来を説いているかのように、実物1.3倍の古田先生の銅像がさわやかな秋空のなかにくっきりと浮び、万雷の拍手をあびた。

除幕の後銅像建立実行委員長外木有光工学部長が、古田先生が精魂傾けて工学部のために尽瘁された遺徳をわれわれは均しく敬仰欽慕し深く肝に銘じており、日本大学建学の精神を教育研究勉学の目的と使命を胸裡に刻み先生の像を永久に守り、将来の工学部を開拓して行く決意を新たにすると共に、先生の御霊にこのことを固く誓うものであります。また、銅像建立の挙は偏えに実行委員会の微力を援けて御協賛と懇切なる御教導を賜わった日本大学本部、日本大学校友会本部諸賢のお力添えの賜であり、さらに御芳志を寄せて頂いた各位、特に工科系校友会など温情溢れる御支援に対して衷心より御礼申上げますと力強く挨拶した。

また、鈴木日本大学総長は、古田先生は政界、官界経済界、法曹会、宗教界などあらゆる部面に幅広いご活躍をなされ、先生の雄渾な理想をよく拝察していた

が、お亡くなりになられた後、いろいろと仕事をやってまいりますと先生が計画された、あるいは残されたお仕事のなかに5年先、10年先をすでに洞察されていて、日がたつにつれて先生が偉大な人物であり、人格者であり、教育者であったことが身にしみじみ感じます。先生は工学部のみならず日本大学全体、或いは日本の私学全体の興隆発展を念じながら永くここに鎮座されることを心から念願するとともに、実行委員会が一体となって、この大事業を成し遂げられたことに対し深甚なる感謝の意を表しますと挨拶された。続いて、柴田日本大学校友会本部長、高橋郡山市長、松山校友会長、吉富父兄会長の祝辞、銅像建立の経過報告、銅像建立協力団体である日本大学理工学部工科校友会、同生産工学部校友会、銅像制作者今里龍生先生等に感謝状の贈呈が行なわれた。最後に、今里龍生先生、遺族代表として古田正武氏の謝辞が述べられて、盛大に銅像除幕式典を終了した。

（機械工学科第4回卒業・本会理事・根本年雄記）

工学部開設30周年に想う

後藤　尚

工学部が郡山に開設されて30年の才月を経て、校友も1万5千余名となり、各界における活躍はめざましいもので、その実績も高く評価されております。私も校友の1人とし、また、母校教員の一員として学部の発展と校友各位の活動をみるとき喜ばしい限りです。

30年の歩みには一歩一歩の積重ねであったと思います。30年の現実をみると、博士課程も完備し、その成果も結実し大きく羽ばたこうとしております。学部の施設設備も充実し、その内容も著しいものがあります。校友諸氏もふと学生時代を振り返るとき、数々の想い出があり、これらのことが活力となり有形無形に作用していることと思います。

想えば、バラック木造校舎、設備が不備の上、雨もりのする実験室から出発して今日の勇姿を示すに至ったことは、この間の学部関係者の熱意と努力そしてその時代時代に学んだ学生の意欲と願望への努力、更に校友としての活躍と数々の動力によるものと思います。私も学び、そして母校にて校友との一時期を振り返ると、その時期時期の悩みや喜びがあり、今では校友の活動している姿が楽しいものでもあります。

この30年は、その時代の変遷は大きく、学生気質も変化をみて来ています。それは歴史の流れで当然発展への道であります。

さて、今後の工学部を想うとき、画一化された現在の大学から母校と校友関係の特色が生み出されれば、工学部の特色ともなると思います。校友と母校の関係は一生切離しのできない関係にあり、その連けいは大切なものと考えます。現在、就職等に関しては校友との懇談会、就職についての講演会等の協力を得ておりますし、校友の設備の利用もあります。ここでなお充実したものとし、校友の活動の場における問題を母校の施設設備を利用し解決するとか、技術研究上での情報の交換により、工業技術の進展に研さんできれば、すばらしいと思います。校友が設備の利用と同時に、後輩と共に問題解決にあたり、思考と展開その成果のまとめと共に生きた社会の教育をもできれば、その効用は大きいのではないかと考えます。今後海外からの技術導入が困難であり、資源に乏しい日本としては、資源、エネルギー、食糧と工業技術の開発は最も重要な課題であり解決して進展に向かわねばならないものでしょう。卒業してからの課題も多くあると考えます。母校との連けいで進めることは一つの特色とすることができるのではないか。また、学生との接触について思うことは、クラブ活動を通じての人間形成、これは母校でも重視しているものですが、卒業して校友となり、後輩の会合に出席いただけることは大変に嬉しいことであります。3年、4年と時が経つと会合に出席しても顔なじみの後輩もいなくなり、つい足も遠のくことになりがちです。でも、出来るだけ出席いただき、時間があれば後輩と共に練習や懇談をもっていただければ、学生には大変有意義なことと考えられます。

このような、両面を主体とし、校友と学生の関係が結ばれ、充実されていくならば大きな特色となるように思われます。

30年を一節とし、更に進展していくには多くの注文もあり、問題もあると思いますが、教職員、学生校友そして父兄の協力がカギになると云えます。充実した教育内容、人間形成そして工業技術の向上に資することが基となると考えます。現今、大学離れの世相が一寸顔を出してきているようですが、高等教育の重要なことは不変で益々重視すべきものです。日大としての伝統の上に工学部の特色が強く出現されれば、一層の進展が約束されるでしょう。

校友会も設立され20年となり、その意義も大きいものとなります。工学部が教育、研究面でまた、学生の自主性とバイタリティーに富む人間形成に一層の努力を計り、校友との交流を深めていくことが大切なように思います。

校友各位の益々の活躍と発展を祈り愚文とします。

（工業化学科第2回卒業・助教授・工学博士）

校友会創設期

関　根　昭　一

いまでこそ、大学の地方分散や新設とさけばれているが、昭和22年戦後の最も荒廃のさ中に東北の地、郡山の旧海軍航空隊の兵舎内に日本大学専門部工科を分散誘致されたことは、当時の古田事務長並びに関係者の方々の先見の賜と敬意を表すものであります。お陰さまで我が校友会も20周年を迎えることになりました。昨年は本学部においては、創立30周年記念式典、さらに故人、古田重二良先生の銅像の建立と多彩な行事が行われ、学部共々校友会の隆盛を心からお慶び申し上げるものであります。

昭和33年に日本大学第二工学部土木科校友会が発展的解消し、全体の校友会をつくろうということで、工学部校友会が発足しました。当時はまだまだ木造二階建の兵舎も残っており1号館は購買部、食堂などに利用されていたようです。校友会が発足し初年度において、校友会館建設の事業があげられ、資金の問題、建設場所の問題など実現にはかなりの苦労がありました。資金については卒業生からの終身会費を徴集することとしたが、卒業生の名簿すら不完全であり、一旦卒業した校友からの会費の徴集はなかなか容易ではありませんでした。その時の初代の会長には土木一回卒の渡辺幸夫氏、副会長には化学一回卒佐藤圭一氏（事務局長兼任）と私がその任につきました。なお事務局には土木5回の小山田克巳君（千葉県君津市役所勤務）が毎日顔を出してくれて事務局の仕事を手伝ってくれました。二年目から私が五年間校友会会長の席を汚すことになりましたが、当時工学部次長江崎伸市先生はじめ各科の先生方の校友会に対するご理解とご協力を得まして、卒業生からの終身会費を卒業式の大変忙しい時に徴収することができるようになり、さらに学生会員からも入会金を徴収できるようになり、ようやく会の資金面のメドがつきました。このことは今日の会費徴収の基盤になっていることと思います。私の会長時代は校友会の創設期であったと思います。副会長には電気科鳥羽先生、化学科後藤先生、機械科菅野先生、事務局長には四年間化学科の高野操先生がつかれ、大変苦労をかけました。なかでも学生課でやっておった入学生に対する下宿の斡旋にはかなりの仕事量があったようです。当時は下宿組合（各地区）と学部、学生、校友会と四者会談が行われ、いつも意見が一致しなかったのをおぼえています。（昭和36年～38年の頃）、また校友会館の一階を学生に開放し、碁、将棋の会場となったこともありました。その他にアカシヤ育英会やバスターミナルの設立などもありました。最後になりましたが校友会設立には三崎町の本部校友会、駿ヶ台の工科校友会のご指導を頂いたことも忘れてはならないことと思います。（電気工学科第2回卒業・元本会会長・二本松工業高校勤務）

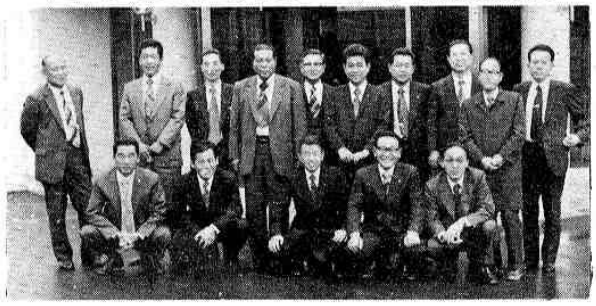
第5回土木同級会開催の感想

去る11月18日、郡山市内の梅林にて、私達は卒業後初めての同級会を21年ぶりに開催しました。当日は快晴、暖かな錦秋でした。此の同級会の出席者は35名で、うち 100点をなかなかくれなかった物理の広川先生、代返の効がなかった応力と鉄筋コンクリートの加藤先生、親代りで就職を世話した港湾の新田先生、親身に指導した地学の田辺先生、アノコノ連発の応力第2の樋浦先生、何時も研究に熱心だった水理の杉内先生等が御出席頂き本当に懐しく飲み交わす酒も最高でした。同級生の皆様は大変立派な社会人となり、顔と名前が一致せず互に恥をかく有り様でした。勤務先は会社社長から学校の先生まで職種は多様で、オス！オイ！等と云うにはお互何か格好がつかなかった感じもしました。21年ぶりといえば年令43才です。学生時代はマージャン屋と赤チョーチン屋通いで名を売った私達も卒業してから苦学したせいか結構胡麻塩頭が見立った。

郡山市は、開成山に立派な市役所、旧競馬場には都市公園ができ、郡山駅前の風景は近代的に一変し、駅前商店街と市役所は、見事な柳並木の道でむすばれ美しい町並には驚きました。また荒池畔にできた日大郡山研修会館は、本当に心休まる宿でした。

翌日は日大へ、あの広大な敷地に校舎、研究室、体育館、図書館、記念館その他クラブ活動施設等の建物が立派に而も計画的に配置され、内容も充実しているのには一同驚きました。私達が学んだ教室には何本かの柱があり黒板が見えなくて苦労したものでしたが、今はクラブ活動施設ですら長大スパンで出来上り、再入学して学びたい気持ちでした。又、大学の先生方、庶務の先生方、掃除のオバさん方は皆当時の方々ばかりで本当に嬉しく思いました。外木工学部長は白髪が増えましたが非常にお元気なので安心いたしました。庶務の武田先生（現在教務）はヒゲが割合い短かくて意外でした。同級生の皆様は総て要職についているせいか全く落着き同級会も立派で紳士的でした。
只、今後は年令的に充分健康に留意し、学んだ知識を人々の為に捧げて頂きたいと祈るのみです。

次回の同級会を3年後と決定し再会を誓い合いました。それまで大学の諸先生方もどうぞお元気で頑張って下さい。（土木工学科第5回卒業・大浦弘夫記）



海外研修記

柳沼福夫

本年度の日本大学海外研修の機会を与えられ、内燃機関および自動車工業の現状調査の目的でこの夏欧米諸国を歴訪しましたのでその一端を記してみます。

先ず北欧回りのコースでソ連邦の首都モスクワによりましたが、初めの東欧圏訪問とゆうこともあって入国時には緊張したものを感じた。ホテルのフロントは旅行者の登録のための受付といったもので、またパスポートの提出は2階の別の所といった具合で勝手がわからずまごついた。宿泊の各階フロアーには係の女性がいて部屋の出入りのたびにキーの受渡しをしており、また朝食一回分として1ルーブルの現金を支給されたのには一寸おどろいた。市内めぐりは、雨にけぶる赤の広場や見学者でにぎわうレーニン廟、ロシアの歴史を秘めたワシリー寺院、それに団体の観光コースになっているレーニンの丘にその偉容を誇るモスクワ大学など車で回ったが、広大な平原をもつソ連の発展は前途洋々であると感じた。クレムリンに出入りしている政府高官の真新しい車は別として、一般には何万キロも走行しているようで車の整備面でも我国のように細部まで容易に行なわれていない様子であった。

コペンハーゲンから鉄道で約1時間のところにあるヘルシンゲルのデンマーク技術博物館に出かけた。ここはスウェーデンを望む連絡港でフェリーが常時出港しており、またハムレットのモデル城といわれたクロンボルグ城が海に面して建っている。

観光客でにぎわう駅からまもなくして人影のまばらなひっそりした通りにこじんまりとした技術館があった 1867年木製2人乗りのペタル踏みの3輪車から1886年2気筒エンジン搭載のラックビニオン方式の車、またデンマーク王室第1号車（1906年）となった単気筒を組立てた4気筒エンジンの車やそれに1906年に42mの飛行に成功したエレハンメルの飛行機など、当時のデンマークの工業技術が秀れたものであることがうかがわれた。展示の一隅には日本のソロバンもみられなつかしさをおぼえた。

ミュンヘンでは1903年に創設されたドイツ博物館がある。ここは交通部門の自動車、鉄道、航空、船舶などのほか、鉱山、電気、薬品、ガラス、音楽関係など現代まで広範囲にわたり系統的に展示されている。また図書館も別に建てられておりドイツの国民性がうかがい知れる。近代自動車の基礎を成したオートーやディーゼルの数々のエンジンを始めオートバイ、乗用車などから船舶用、航空用を含めてドイツの高度な技術水準の歩みを感じさせられた。車輌の方では1765年に試走したという足踏み式自動車や1886年カールベンツの第1号車となった棒ハンドルでスポーク車輪の3輪車、またはレオンの蒸気3輪車（1891年）など開発期の時代ものの車があり、1900年に入ると前輪駆動、パイプフレームのアドラーや4気筒18馬力のエンジンで60Km／h の速度をもつオペル（1908年）、それとニューヨーク・パリ間のコースを走破したプロトスなど。そのほかルンプラー設計の流線型のセダンやW6型のエンジンをのせた高出力車、また固体燃料ロケットで推進したオペルのレコード車など自動車歴史をかざる各車が展示されていた。展示のエンジンなどは見学者が自分で回してその機構を観察出来るし、図解や説明も簡略に併記してあるので子供や女性でも理解し易くなっている。

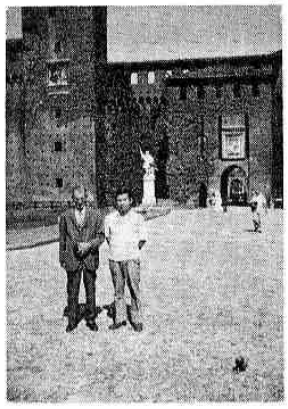
イタリヤの工業都市トリノは世界的に有名な自動車メーカーのあるところで知られているが、ポー河畔にカルロ・ビスカレッテイが創設した自動車博物館がある。1960年に開館し自動車展示専用に設計された3階建てのもので館内も他の所のものと比較して近代的で明るく、映写設備や4カ国同時通訳の装置がほどこされているとのことでした。

1854年ボイラーを馬車にとりつけた蒸気自動車や、1896年イタリヤ自動車工業の先駆者と呼ばれるベルナルディ設計の前3輪の3輪車、1899年18才の天才少年ブガッチ設計のユニークな車などがあり、1907年の北京パリ間1万6千キロの長距離を2カ月かかって走破したイタラの優勝車や、その当時の世相をしのばせる写真それに車の各種ポスターなど展示されていた。そのほか近代イタリアの代表的スポーツカー、大容量のエンジン搭載のレースカー、それにフィアットのガスタービンカーなど興味つきないものがあった。

それぞれの伝統をもつヨーロッパからアメリカ200年の歴史の発生地ボストンに入ったがここは当時の開拓者の苦労をしのぶ名所旧跡が数多くみられ、マサチューセッツ工科大学やハーバード大学などの有名校、また世界有数のコレクションをもつボストン美術館を有する東部の代表的な都市である。英国調の面影が強く残されている街には高層ビルが立ち並び、そこを走る大型乗用車の多いことからやはりヨーロッパとは異ったものを感じた。

以上歴訪した中の数カ所の見聞記になりましたが、数多くのOBの方々が体験されている海外報告の一頁になれば幸いです。

（機械工学科第5回卒業・工学部専任講師）



フランスの老紳士とミラノ城にて

学術研究報告会行われる

昭和52年度の日本大学工学部学術研究報告会は、12月21日(水)午前9時30分から午後4時まで、学内の6部会9会場において盛大に開催された。
この報告会は、例年校友会が協賛して行われており、学術研究振興に多大なる成果をあげて来ましたが、52年度は更に発表報告件数も昨年度より多くなり、30周年を迎えた工学部の学術研究面での躍進が伺われる。

因みに講演件数は

一般教育科	ー自然科学関係ー	11題
	ー人文・社会科学関係ー	8〃
土木工学科		26〃
建築学科	ー構造系ー	22〃
	ー計画系ー	21〃
機械工学科	ー流体工学・内燃機関・計測関係工学ー	13〃
〃	ー材料工学・工作機械人間工学ー	11〃
電気工学科		20〃
工業化学科		11〃

であり、総計143件の講演が行われた。
研究報告内容は、全ゆる面にわたっており一概に述べることは出来ないが、基礎的研究、応用研究、実験および調査結果報告など工学部にふさわしいものであった。講演者は、学内外の研究者で工学部教職員はもとより、校友、大学院生など多数にわたった。また聴講者は、研究にたずさわっている校友、民間人および熱心な学生であり、特に工学部の3年生は、来年度の卒業研究のテーマの決定に際して、各教員の研究分野を探り参考とするため積極的に聴講していたようである。

工学部では、学術研究報告会を盛大にするため、校友の皆様にも参加されますよう毎年募集しております御希望の方は、是非申し込まれますよう御案内いたします。次回の報告会は、昭和53年12月21日の予定です。原稿締切は、一ケ月前ぐらいですが詳しいことは本会事務局へ御相談下さい。

その他学術関係において工学部では、昭和22年郡山の地に専門部工科として発足して以来、30周年を迎えた記念として、学術研究面での発展の礎となる記念論文集を発刊しました。論文集は各学科の教授、助教授により執筆され、21題がA4版410ページに掲載された立派なものであります。

これら学術研究活動の活発化により、躍動する工学部の今後の発展を期待したい。

（建築学科第7回卒業・専任講師・小栗治男記）

北桜祭の運動会に参加して

日本大学工学部恒例の北桜祭が去る10月30日から11月3日までの5日間、盛大に行なわれました。

今回は、日本大学工学部の前身である専門部工科が東京から郡山に移設されて30周年という記念すべき北桜祭となり、我々校友会に於いても積極的な参加により、記念行事にふさわしく、内容の充実した意義のある北桜祭とすべく11月2日に開かれた大運動会に参加したわけであります。

当日は、快晴というわけには行きませんでしたが、関係者をはじめ皆様の記念行事を何とか成功させたいという一途の気持が天に通じたのか雨は降らずにすみました。

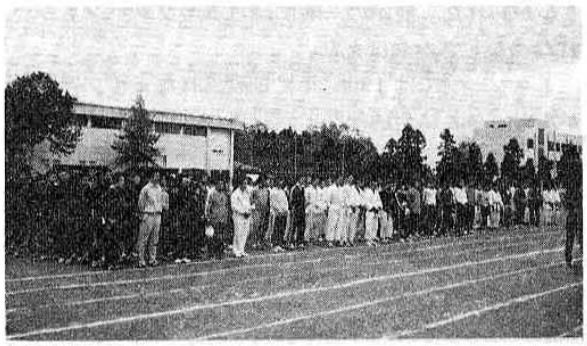
我々校友会は、400mリレー、綱引き、サッカーゲーム、思い出コロコロ、宝さがしの5種目に参加し、中でも父兄会、教職員、校友会対抗の400mリレーに於いては、2組が代表として参加し、最初は、スポーツマンシップにのっとり、参加することに意義があるという気持でしたが、いざレースになると、若い血潮がみなぎり？闘志満々となり、その結果は、1組が優勝という輝かしい成績をあげることができました。優勝したチームは、伊藤義人（電気16回）、渡辺信一（土木21回）、広田耕一（土木24回）、藤川英敏（土木25回）の4人の選手です。

参加して、久々に学生時代のことが思い出され、意義のある1日をすごすことができたことを、嬉しく思っております。

今後もこの北桜祭を通して、学生の皆様には、青春時代の得がたい体験となり、かつ又、学生時代の思い出となるとともに、校友の皆様には、学生時代を振り返り、それぞれ学生時代の青春を思い出すことが出来るように、北桜祭がますます盛大に行われ、限りなく続かれるよう祈念いたします。

最後に、今回の北桜祭の実行委員をはじめ関係者の皆様の御苦労に対し、感謝の意を表するとともに、今後我が工学部のますますの発展を期待いたします。

（電気工学科第16回卒業・本会理事・伊藤義人記）



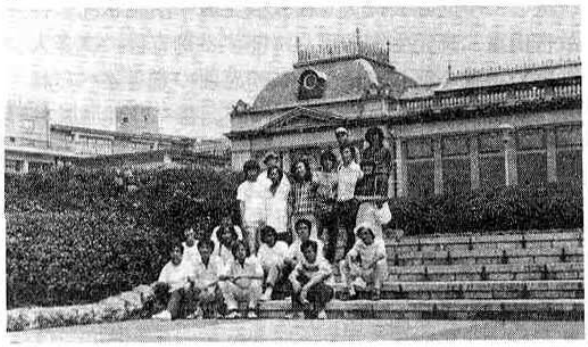
学生のサークル活動

建築研究会

学生の枠、授業の枠を越えた全学的な創作活動の向上を目的とし、昭和49年度から始まった学内競技設計は今年度で第４回目を迎えました。第１回目は「学生のためのコミュニティセンター」第２回目は「湖畔に建つセミナーハウス」第３回目は「セカンドハウス」第４回目は「街中にあるコミュニティ空間」との課題で行なってきました。今回の応募申し込みは43名でそのうち出品作品は13点となり回を重ねる毎にコンペに対する学生の意識も向上し、応募数も増加してきたことは主催者として喜ばしい事と思っています。

なお今年度の研究活動はデザイングループ(G)の「環境に応じた色彩表現」、住宅Gの「住宅の内、外装材料の研究」、設計Gの「青年の家の研究」というようにグループを中心とした活動を行なってきました。その成果を北桜祭にて発表しました。そこで得た多くの人達の評価は私たちの研究活動によりよい資料となると思います。

今年度は新たに都市計画、民家研究の２つのグループも結成され建築という幅広い研究活動を行なっていきたいと思っています。



柔道部

柔道とは、明治15年に嘉納治五郎先生が、日本古来の柔術諸派の長所をとり、短所を捨てて、教育的立場から科学的な検討を加え世に送り出した。最も武道の利に適ったものです。

柔道部は、練習を通しての身心の健全なる育成、部員相互の「親睦」と「和」、そして人間形成を目的として、工学部開設直後に設立されて、本年で28年目を迎える伝統あるクラブであります。部員数は33名と少数ではあるけれど、部員一同毎日の練習に励んでいます。

年間の活動内容の主なものは、春の合宿、新入生歓迎会、夏の合宿、幹部送別会、昇段審査会参加、体育会行事参加並びにインカレ・オール日大などの春、夏、秋季に催す大会に出場。また、特に郡山市々民体育祭柔道大会出場及び年末には郡山市の聖マリア園においてもちつき大会を毎年行うなど、地元とのつながりを保とうと努力しています。

本年は、春の学部対抗柔道大会及び秋の日本大学体育祭柔道大会においては優勝、また全日本理工科学生柔道大会では準優勝という成績を納めました。

軟式庭球部

我が軟式庭球部は、設立31年目を迎える伝統のあるクラブです。この伝統を基盤とし、現在部員30名が集まり、コート狭しと毎日精一杯練習に励んでいます。

部のモットーは、部員同志の和を大切にし、常に部員一丸となって試合に臨むことです。

年間行事を見てみると、対抗試合では春季、秋季両大会、そしてインカレへの参加があり、このインカレでは、東北地区で準優勝と昨年より大きく前進しました。その他福大との定期戦、東北工大、東北学院大工学部と我が部との間で行なわれる三工学部定期戦があり、これらの試合を通して互いに親睦を深め合っています。また、同じ郡山にある大学として、郡山女子大との交流も行なっております。部内活動では、新入生歓迎会、春季合宿、夏季合宿、４年生の送別会、体育会行事への参加があるほか、ＯＢとの交流を図る意味で軟式庭球部名簿を作成しこれを送り、そして毎年秋には、顧問の先生の名前を頂いてつけた「外山杯」という名でＯＢとの対抗戦を行なっています。

このように、我が部では、それぞれの活動を通して一歩一歩前進し続けています。

支部ニュース

東海支部総会開催さる

第５回東海支部総会は去る６月25日、名古屋駅前、ホテルニューナゴヤで、校友会本部より半沢副会長、事務局紅一点河内嬢を来賓に迎え、会員多数出席のもとに盛大に開催されました。

総会は、平野卓支部長（土木３回卒）の挨拶で始まり、次いで半沢副会長より校友会全般の活動状況と特に故古田重二良先生銅像建立に関する御寄付には多大の御協力を戴いたことについての感謝の意を述べられた後、今後会員相互の親睦を計られ、益々の御発展を祈ると挨拶がありました。次に本年度東海支部が行ってきた事業について、ゴルフ大会を開催したこと、就職指導懇談会、住所録の見直し、役員会等を行ったことの報告がありました。最後に52年度の活動計画については、更に横の連絡を計る様、役員の増員を考慮し、役員会で計画を立て実施したいと云うことに賛同を得、総会を閉じ、引き続き、懇親会を開催しました。

懇親会では、名刺交換や自己紹介で、おもわぬ所でお合いできた人、仕事上で関係のある人、自分の近くに先輩、後輩がいたことを知った人等さまざまで、一人一人の顔にはうれしさ、なつかしさをかくしきれない雰囲気をかもしだし、時が経つにつれ、いい気分になり、力あまって、歌やおどりがとびだし、会場は一転してにぎやかになりました。なつかしい歌、想い出の歌、軍歌、そして応援歌と、やつぎばやに歌がとびだし、時の過ぎるのも忘れ、楽しく過しました。

最後に全員で校歌を合唱しながら、再会を約し、散会しました。一年に一度の懇談会とはこの様にすばらしいもので、久しく郷里より、又友達より、はなれていればいるほど、なつかしさが増してくるものであります。来年も又総会も開催されます。会員の方々の出席を持っております。

（土木工学科第19回卒業・下里組勤務・下里正美記）

北海道支部総会について

支部結成以来第３回目の北海道支部総会が、昭和52年８月５日札幌市中央区南３西５三川屋会館に於て開催されました。北海道支部は、北海道全域にわたる校友400余名の会員がおり、土木６回卒業東急道路㈱札幌支店長の神田哲夫氏（第２代目支部長）以下役員多数により運営され、日頃研鑽された学術研究あるいは情報交換を通じ互いの親睦を図るべく年１回の定期総会を開催しております。この総会も大学が夏期休暇に行なう在学生の父兄懇談会で大学教職員が多数現地に来る機会に合せて行なっております。今回は約50名の会員が集まり、工学部事務局長後藤弘先生外８名の教職員が出席され、会は幹事長の土木８回卒業阿達斉氏の開会の挨拶にはじまり、神田支部長挨拶、土木17回卒業藤林義弘氏から収支決算報告が行なわれました。

続いて来賓として根本事業部長が校友会の事業活動説明と近況報告、特に古田重二良先生の銅像建立についての経過説明と協力要請も含めて挨拶がありました。

次に工学部事務局長後藤弘先生から、工学部の現状報告と学園施設の整備状況、入学生状況及び卒業生の就職状況等を含めた挨拶に集まった多くの校友は遠い母校での過ぎ去った日の学園生活を思い出してかしばし声もなくその話に聞き入って我をわすれているようでありました。続いて懇談会に移り卒業以来何年かぶりで逢った教職員と校友、又校友同志がそれぞれ再会出来たことを喜びで時間の過ぎるのもわすれ話し合いました。最後に一同校歌斉唱の後互の健闘を誓いあい一年後の再会を固く約し盛会のうちに幕を閉じました。なお、新たに北海道地区に転勤等なされた方は次のところまで御連絡下さい。

連絡先　札幌市役所道路建設課内　船越政明
（土木15回卒業）

（土木工学科第８回卒業・本会理事・武藤貞泰記）

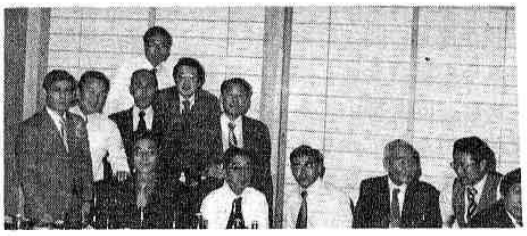
機械科第９回卒業生のつどい

去る11月19日、機械工学科第９回卒業生の同級会が日本大学郡山研修会館において開催されました。昭和36年３月に学窓を巣立って、早や16年が過ぎ、第１回目の同級会であるだけに、会の案内に対して多数の方々から御返事がありました。中でも、目下働き蜂の年代で多忙を極め、出席出来ない無念さを嘆く声がたくさんありました。それでも、何とか写真の顔ぶれが集まり、無理を言って御出席いただいた外木先生、一色先生、菅野先生、柳沼先生、（吉沢先生、遊佐先生は製図学会関係で仙台に出張中）を囲み、昔話に時の経つのも忘れて、夜おそくまで語り合いました。たまたま席上次回の会のことについて話が及び来年は是非東京で（同級生の約60％が関東地区に在住）、それも出席しやすい日時を選んで開催しようということで衆議一決しました。

翌日は、希望者で学内を見学して回り、すっかり昔日の面影がなくなった学園に、喜こんだり、不平がったりしておりました。

しかし、何と云っても、立派な校舎、図書館、教室、庭園、体育館、三十周年記念会館などを見て、皆心の底から満足している様子でした。

（機械工学科第９回卒業・専任講師・佐藤光正記）



CAMPUS

mini MEMO

◆外木工学部長が日本大学副総長に就任

外木有光工学部長は昭和53年1月1日付で、工学部長兼任のまゝ日本大学副総長に就任した。日本大学には副総長が3名おり、専任副総長に高梨公之教授が、他の2名に外木工学部長と妻倉昌太郎文理学部長が任ぜられて、鈴木勝総長を補佐することになった。

工学部長が大学本部の重要職に就任するのは、野引勇工学部長の常任理事（45.10.16－47.9.21）以来である。

◆初めての論文博士が誕生

日本大学大学院工学研究科では、校友会報No.31で既報したように、52年3月31日に初の課程博士（工学博士）2名の誕生をみたが、それにつづいて、過日、初の論文博士が誕生した。

工学博士　後藤　尚　（52.7.15）

微量金属の高分子量アミン抽出を用いる原子吸光分析に関する研究。

後藤尚氏は第二工学部工業化学科の第2回卒、29年4月より母校に勤務し、現在、助教授。

工学博士　渡辺竹春　（52.11.30）

テルミット溶接の改善に関する研究。

渡辺竹春氏は名古屋大学大学院理学研究科修了、現在、日揮株式会社検査部長。

◆日本大学郡山研修会館と改称

日本大学郡山セミナーハウス（郡山市愛宕町2－22 TEL 23－4193）は52年10月から日本大学郡山研修会館と改称した。利用の際は現地での申し込みは受けつけませんので、すべて工学部庶務課（TEL 44－1300）へ

◆『三十年史』を発行

日本大学工学部では、開設30年を記念して『三十年史』を発刊した。右は、朝日新聞の福島版での紹介記事である。購読希望者は校友会事務局まで。（要1800円）

◆日本大学工学部三十年史　日大工学部の前身、専門部工科が東京の隅河合から郡山市に移転されたのは昭和二十二年、もう三十年になる。今月二十九日には記念式典が行われるが、一つのエポックを迎えて、編さんされた。同工学部の歩みを収録しているが、四十三年に起きた学園紛争も詳しく記されており興味深い。また現況のほか、校友会、付属東北工業高校についても触れている。A5判、七百四十四ページの箱入れ上製本。編集者は日大工学部三十年史編さん実行委員会、発行者同工学部で福島市北町の大盛堂印刷所で印刷された。希望者は同工学部事務局まで。

◆永年勤続者を表彰

工学部では、三十周年記念式典の席上、15年以上の永年勤続者（教員47名、職員31名）を表彰した。

『三十年史』には「日本大学工学部人事年表」が巻末に37ページにわたって掲載されている。専任の教員や職員の採用・昇格・退職を取り扱ったもので、取扱っている実人数は428名にのぼる膨大で貴重な資料である。

今回の表彰者のうち、年表から昭和29年末までに就職された人々を紹介すると次のようになる。

（敬称は略します）

教員		職員	
22・6・1	岩田　芳夫	23・3・1	武田　光二
22・6・15	廣川　友雄		遠藤　一夫
22・12・1	外木　有光		神山　秋信
23・9・22	本間　磐		七海　清六
24・1・15	西本　勝之	23・4・1	吉田　宗
24・4・1	遊佐　祥郎	23・12・1	斉藤　キミ
25・8・15	中鉢　禎一	24・4・1	神山　イチ
26・4・1	師橋　勇二		七海　千代
26・6・1	倉田　博	24・8・1	遠藤トミ子
26・9・26	高木　昭	28・4・1	五十嵐サイ子
27・4・1	吉沢　周蔵	28・10・3	岩堀　慶子
	宇野原信行	29・5・3	鵜川　美子
	本郷　忠敬		
28・4・15	鳥羽　重幸		
29・3・10	新田　亮		
29・4・1	後藤　尚		
	杉内　祥泰		
29・11・1	横井　博		

（た）

事務局だより

昭和53年３月１日

日本大学工学部校友会
会　員　各　位　殿

日本大学工学部校友会
会長　松　山　光　克

昭和53年度総会通知

校友の皆々様には、各職域において益々御健闘のこととお慶び申し上げます。さて、本会会則第29条により、日本大学工学部校友会昭和53年度総会を下記により開催しますので先輩、後輩お誘い合わせの上多数御出席頂きたく、御案内申し上げます。

記

1. 日　時　昭和53年４月22日（土）　午後３時
2. 場　所　日本大学郡山研修会館　（郡山市愛宕町２－22）　ＴＥＬ23－4193
3. 議　題　昭和52年度会務及決算報告・昭和53年度事業及予算案審議・その他

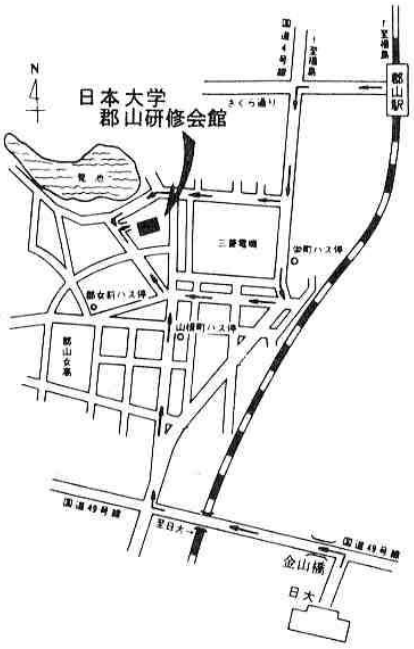
追　伸

(1) 諸般の事情により、校友会報第32号に掲載の上記案内によって、総会通知としますのでご了承ねがいます。
(2) 出席なさる方は、準備の都合がありますので、なるべく御連絡下さるよう希望します。
(3) 総会終了後、引き続いて同所において恩師を迎え懇談会を催します。
(4) 研修会館に宿泊を希望したい方は、別項を参照になられ母校庶務課に申し込まれたい。

日本大学郡山研修会館の利用について（再掲）

－宿泊を希望する場合－

研修会館に至る略図



1. 宿泊を希望する校友は、30日前から５日までに工学部庶務課に申込む。現地では受付けない。
2. 宿泊料は、１泊２食付　2100 円
3. 所在地は、郡山市愛宕町２－22（左記略図参照）
4. 詳細は、工学部庶務課に問い合わせること。

TEL　0249 － 44 － 1300㈹

校友会報第32号

発　行　所　日本大学工学部校友会
福島県郡山市田村町徳定字中河原１
郵便番号　979 － 66
電話番号　郡山（0249）　44 － 1327番
振替口座番号　（郡山）1990番
発　行　日　昭和53年２月１日
発行者代表　会　長　松山光克
編集者代表　事務局長　佐藤光正